



『TEAM KGA ジュニア』が 発進!

2020年のその日は、雲ひとつない快晴です。全人類の平和の祭典、第32回夏季オリンピックが開幕しました。ゴルフの競技会場周辺には、世界中から集う国と地域の国旗が翻っています。

ゴルフ競技が正式種目となった、リオデジャネイロ五輪から2回目となるこの大会で、世界中が注目しているのは、ひとりの日本人選手です。やがてティーオフ。「がんばれ、ニッポン!」の大声援が静まり、静寂の中に鋭い打球音が響きます。打球を追って微笑む彼の左胸には、誇らしげに日の丸が輝いています。へ

関東から世界へ!

有望なジュニアゴルファーを育成します

こんな感動的なシーンが、8年後の近未来に実現するかもしれません。今、この未来のヒーローは、関東のどこかにいるのでしょう。ひよつとしたら、まだクラブすら握ったことがないかもしれません……。

KGAの育成選手を オリンピックの日本代表に!

関東ゴルフ連盟(KGA)は、平成24年度の重点課題のひとつとして「ジュニアゴルファーの育成」を掲げています。(42ページ・竹田恒正KGA理事長の「所信表明」を参照)

ジュニア育成活動は、従来から行っている健全なゴルフの普及・発展を図るといふ、KGAの使命でもあります。これを模式化すれば、ピラミッドの基礎となる若年層を拡げ、その頂点に日本アマチュアゴルフ選手権に出場できるような、有望選手を発掘して育成することです。この育成システムはすでに有効に機能し、優れた人材を(公財)日本ゴルフ協会(JGA)のナショナルチームに、数多く送り出しています。

こうしたジュニアへの普及活動と並行して今期から新たに、世界トップレベルのプレーヤーに伍して戦える選手の発掘・強化を、JGAの方針を基にKGAが推進します。その目標はKGAが育成した選手をJGAに送り、日本の代表選手として、オリンピックに派遣することにあります。

「オリンピックに選手を派遣する以上、メダルを獲得し、国民の期待に応えることがゴルフ界の目標になります」(竹田理事長)

ゴルフは2016年リオデジャネイロ五輪から、正式種目になります。さらに2020年のオリンピックも、ゴルフは正式種目に内定しています。その開催都市は東京が有力候補なのです。

「KGAとしてやるべきことは、有望な若



「KGA春季ジュニア・ゴルフスクール」で、元気な小学生たち。

年層の人材を発掘して育成することであります。JGAのナショナルチームに入れて、育成を図る以前の若年層の育成が、KGAに期待されている役割と存じます」(竹田理事長)

KGA加盟倶楽部のみならず、全国民の夢と希望を担うこのKGAの壮大な構想は、1年間の準備期間を経て、着々と実現に向けて進行しています。

そのプロジェクトの名称は「TEAM KGA ジュニア」です。

体力、運動感覚、精神力に優れた世界レベルのジュニアを！

『TEAM KGA ジュニア』プロジェクトは、明確な目標を掲げてスタートします。

9〜14歳(小学4〜6年生および中学生)を対象として、厳選された少人数の人材を選抜し、専門委員とともに育成・強化を実施し、オリンピックに選手を派遣する目標を達成する。

この実施に向けて3月26日に開催された、平成24年度第2回ジュニア育成委員会強化部会の、白熱した議論を誌上再現しましょう。

佐藤ジュニア育成委員会委員長「この『TEAM KGA ジュニア』プロジェクトは、昨年から準備がスタートしました。現在はランドデザインをほぼ固め、都県ごとの支援組織と陣容が決まっております」



白木 仁・筑波大学教授
「小学生は毎日3度の食事と、野外遊びが大切。専門的な指導は不要」と、生活習慣の励行を助言。



海老原清治プロ
「練習中はコーチの感覚で、理論は食事中の会話で」と、効果的な指導の欧州シニアツアー賞金王。



中村悦子・日本女子プロ協会副会長
「指導者は技術を見せ、言葉で教える両面が必要」と、子供の自主性に任せ親の過干渉は禁物と強調。

KGAジュニア育成委員会の活動は、従来の活動を継承する普及部会と、今回のプロジェクトを推進する強化部会の、二本柱になります。両部会の活動の概要について佐藤委員長から説明があり、以後、強化部会が抱える課題について、具体的な提案が続出しました。

笠川強化部会部長「フィジカル(体力)、運動感覚、そしてメンタル(精神力)に優れた、世界レベルのジュニア(注・仮に子供たちと表記)の発掘が課題でしょう。ゴルフ未経験者となれば、素質をどう判断するかの基準が必要です」

笠川部会長は、人材発掘から育成の過程において、その子供たちの人生を預かることになる、と責任の重さを語っています。

人材発掘の基準については、白木仁筑波大学教授(※KGA参考)から、具体的な方向性が示されました。

白木教授「ゴルフは体力と技術の両面で、向上を図るスポーツです。私の研究や経験からしますと、ゴルフの技術に優れた子供たちを、フィジカル面で強化するほうが早道だと思います」

ゴルフのトレーナーとして、白木教授が初めて指導したのが松山英樹君(東北福祉大)です。マスターズでの松山君の活躍が、白木教授のフィジカル強化システムの効果を証明しています。

現役プレーヤーとして、また指導者として輝かしい実績のある海老原清治プロ(※KGA参考)は、実践を通してのジュニア育成を語ってくれました。

海老原プロ「中高校生がドライバーの飛距離だけを競えば、野球部やサッカー部の体力自慢の選手が勝つでしょう。それとゴルフはまったく違います。できればショットゲームだけを1、2年やらせて、100ヤード以内を2(ワンオン、ワンパット)であがれるような選手を育成したいですね。飛距離を延ばすことは、さほど難しくありません」

興味あることに、フィジカル面の白木教授も、スキル面からの海老原プロも、ジュニア育成の方向は同じなのです。

白木教授「小学生には筋トレのようなフィジカルの強化も、コンディショニング(体調の管理)も必要ありません。外でよく遊

TEAM KGA ジュニア

The Road to the Olympics



金 尚謙君 (小6)
ひととき大きい身長
160センチ、飛距離
240ヤード。「野球も
やるけど、ゴルフの
ほうが楽しい!」

中曽根寛瑛君 (小4)
「ゴルフは4歳から。
飛距離は170ヤード。
夏は水泳大会にも出
る」と、日焼けした
がっしり体型。

清水大河君 (小4)
「競技は楽しい。東
京都で3位になったこ
とがある」と、きびき
びした動作が目立っ
た明るい少年。



半田怜士君 (小4)
アニメ「ワンピース」のファンで、
ボールマークがお気に入り。「ゴル
フが大好き!」

岩崎美紀さん (小6)
最後まで一人でバット練習を続け
「将来は賞金女王!」と元気な声。
153センチ、飛距離220ヤード。

山積する課題の解決は 走りながら考える姿勢で!

(社)日本女子プロ協会副会長の中村悦子
プロ(※KGA参与)は、隠れた問題点を
指摘しました。

中村プロ「ゴルフを通じての人間形成、
つまりライフスキルの向上が大切。ただ
し、ここに保護者が関与すると、指導の
現場では親たちとの関係が障害になりま

ぶことで充分なのです」
海老原プロ「子供の頃に、遊び感覚で覚
えたショートゲームは強いですね」
白木教授「音楽教育と同じで、子供の頃
に覚えた楽器操作のタッチは、生涯消
えません」

す。実際、モンスターパーアレント(異常
に過保護な親)も珍しくないのです」
白木教授「フィジカル強化には食育(栄養
摂取)も大切で、ここでも親の協力が必要
になります。成長期の体をつくるには、
毎日3食をしっかり食べることを」
中村プロ「親子で野外遊びをすることで、
コミュニケーションも強まるでしょう」
親の過保護問題に関連して、日本人選
手のメンタル面の弱さが浮上しました。
中村プロ「子供が親にゴルフをやらされ
ている状況で自主性がなければ、メンタ
ル面の成長はありません」
海老原プロ「メンタルは強化できません。
心を強くするカギは、練習で得られる自
信でしょう。何十年も競技者人生を歩い
ている私でも、時にはビビります。試合
でビビるのは、個人的な楽しみです」
白木教授「メンタルトレーニングではな
く、スキルの練習ですね。となりますと、
指導者の養成が急務です」
指導者の養成に関する強化部会の活動
方針には、「スポーツ医・科学の専門分野、
英語力ならびに技術能力などの支援組織
を設置する」とあります。つまり各分野
での、専門の指導者が求められています。
白木教授「スポーツ種目によっては(公財)
日本体育協会主導の選手育成マニュアル
があり、専任コーチもいます。逆にプロ
競技のある野球は、プロ野球選手出身者
による指導が効果的です。ゴルフも同様

に、プロコーチの参加が必要では」
中村プロ「現在、日本女子プロ協会では
小学校低学年生を対象に、18名の専任
コーチがいます。さらに指導者を増員
中です。ここから有望なジュニアゴル
ファーを『TEAM KGA ジュニア』
に推薦できるか、検討してみます」

ここまでの議題である有望な人材の発
掘、指導体勢の確立、保護者との関係に
ついて、強化部会の各委員からも活発な
発言が相次ぎました。『TEAM KGA
ジュニア』は、長期にわたる壮大なプ
ロジェクトです。そのスタート直後から、
猛ダッシュの勢いを感じます。
富田副理事長「練習環境として、ジュニ
アにゴルフ場や練習場を開放する依頼も
着々と実現しています。この夏までには
人材の選考基準と指導体勢をつくり、秋
には選手育成を具体化したと考えて
います。2020年のオリンピックに、
KGAのスーパージュニアを送り出し
ましょう!」
竹田理事長「KGA加盟倶楽部は1都10
県におよび、それぞれの倶楽部の支援が
前提です。また各都県の体協組織との、
協力体勢も不可欠です。各組織が力を合
わせて、山積する課題の解決に当りましょ
う。立ち止まって考えるのではなく、走り
ながら考える姿勢が大切です!」
力強い、まとめの言葉でした。

涙の数だけ強くなれる

米国の公営コースでプレー中、前の組の様子に興味を覚えた。ラウンドする2人の少年を、老人が優しい眼差しで見守っている。どうやらマッチプレーのようだ。ゲームが緊迫しているのか2人に笑顔はなく、会話も聞こえてこない。

やがてマッチに決着がついたようで、少年たちはグリーン上で握手をする。それまで離

れて観ていた老人が、近寄って2人の健闘を称える。老人の手振りは「このままプレーを続けて、ホールアウトしよう」とすすめているようだ。しかし、負けたほうの少年はそこを離れ、ひとりでクラブハウスに向けて歩き出した。日本なら小学校高学年の少年の肩に、ゴルフバッグはとても重そうだ。彼の心情を察すると、誰にも悔し涙を見せたくないのだろう。小さくなっていく後ろ姿には、グッドルーザー（誇り高き敗者）のオーラすら感じられた。

帰り支度をしていた老人に、どんな競技なのかと聞いてみた。

「地元の子供たちで組み合せをつくり、試合日の放課後に送迎する。決勝マッチとなれば両家族の応援もあつて、優勝者にはメダルが授与される。タイガー（ウッズ）やフィル（ミケルソン）だって、ジュニア時代の敗戦に耐えたからこそ、今日の強さがあるんだよ」

3人を乗せて走り去る車を見送り、また想像してみる。負けた少年はいつもより元気に「ただいま!」と。ママは結果など聞か

ないで「よくやったね!」と。勝ったほうの少年は大人びた口調で「次が重要だよ」ととパパに言う。きつと幸せな時間だろう。

さて、我が国のジュニアゴルフの現状はどうか？ 放課後にプレーする環境が少ない。狭い地域で試合が成立するだけの競技人口がない。親権者の理解が得にくい……などの課題が山積するなか「TEAM KGAジュニア」がスタートした。オリンピックの表彰台を目指して!